

幼児における向社会的行動（思いやり行動）と内的ワーキングモデル

武田京子*・佐藤 瞳**・菅原正和**・昆 保典***

(2005年10月31日受理)

1. 問題と目的

心理学では他者に対する思いやり行動や援助行動は、向社会的行動 (prosocial behavior) または愛他行動 (altruistic behavior)¹⁾として研究されてきた。Eisenberg ら²⁾は、向社会的行動を「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、人々のためになることをしようとする自発的な行為」と定義している。本研究では、幼児の向社会的行動を幼稚園と保育所に分けて分析し、相違点の背景について論及する。

向社会的行動の発達を支える側面として、①向社会的判断、②役割取得、③共感性が挙げられてきた。向社会的判断とは、「自分がなぜその行動をする (しない) のかの理由づけ」である。Eisenberg らは発達順に6段階に分類しているが、順序性については普遍的ではなく様々な文化差があることが知られている³⁾。役割取得は、「他者の思考、感情、視点を理解する能力」で、幼児期から児童期にかけて発達し Piaget, J. の認知発達理論と対応する。発達段階は、「自己中心的→主観的→自己内省的→相互的→質的体系→象徴的相互交渉」に分類され、役割取得能力の高い子どもほど向社会的行動をとることが多いと考えられている。共感性 (empathy) は、他者の感情あるいは他者のおかれている状況を認知して、それと一致しないまでも同じ方向の感情を共有することを指し、他者の情動状態や状況の理解によって導かれる代理的情動反応 (vicarious emotional response) である。これらの3要素は、状況を認知して向社会的行動を起こす際の媒介要因であり、動機づけとなる。しかし、動機が十分に高まっても自力で相手を援助する自信がなかったり、必要なスキルをもっていないと向社会的行動は実現しない⁴⁾。発達の早い時期に強い愛着 (attachment) が形成されることは、他人に対する関心を生み出す重要な先行条件であり、共感性の発達に欠くことのできない条件であると考えられる。愛着は子どもが特定の人に形成する情愛の絆であり、養育者との情緒的な結びつきを指す。発達早期に形成される愛着によって、世の中に対する安心感、信頼感を培う。自己にとって愛着対象となるのは誰でどのような反応が期待できるか、どのように受け入れられるかに関する期待、確信や思考は、無意識のうちにその後の世界や他者とのかかわり方にある特定の形で影響を及ぼす。これが内的ワーキングモデル (Internal Working Model; IWM) 理論である。IWM は、

* 岩手大学教育学部 保育学

** 岩手大学教育学部 発達心理学

*** 専修大学北上福祉教育専門学校 心理学

人や世界との持続的な交渉を通して形成される、世界、他者、自己そして自分にとっての重要な他者との関係性に関する表象である⁵⁾⁶⁾。IWMを用いることによって、人は遭遇する出来事を解釈・評価し、未来を予測して有効な行動の計画を立てることができるので、適応行動の指標ということもできる。

Ainsworthは、ストレンジ・シチュエーション法における親との分離や再会の場面における子どもの様子により、愛着の質を「安定型」「アンビバレント型」「回避型」に分類している⁷⁾。これらの型は養育環境の性質にあわせてとられた適応的のストラテジーとして把握すべきであり、子どもあるいは関係性の「個性」とみなすべきものである。

これらの先行研究をまとめると向社会的行動は、発達初期の特定の対象との愛着形成によって基盤がつけられ、効果的な条件下の教育やモデリングの影響により促進されることを示している。本研究では、先行研究では数少ない幼児とその親を対象とし、向社会的行動を多角的に分析し、先行研究から導き出された仮説の検証を行う。さらに幼児の行動に対する親と保育者の認知差について考察する。

仮説①IWMと向社会的行動との関係：発達初期に強い愛着を形成することが、その後の向社会的行動の形成に影響を及ぼす可能性があるため、愛着形成が安定している子どもほど向社会的行動が多いと推測する。仮説②幼稚園児と保育所児の比較：向社会的行動が教育によって促進されると考えた場合、教育的保育の行われる幼稚園児のほうが向社会的行動の発達が進むと推測する。仮説③向社会的行動と加齢との関係：向社会的行動が子どもの認知発達や教育によって促進されると考えると、加齢に伴った向社会的行動は増加すると推測する。仮説④保育者と保護者の幼児の向社会的行動に対する認知の比較：保育時間の違いにより保育所児のほうが幼稚園児よりも保護者とのコミュニケーションが希薄になりやすいと考えられるため、保育者と保護者の認知的差は保育所児の保護者の方が大きくなる可能性がある。

2. 方法

<対象> A県内の3歳から5歳までの幼児（幼稚園児261名、保育所児334名；3歳児158名、4歳児218名、5歳児219名；男児293名、女児302名）計595名を分析対象とした。

<調査時期> 2003年7月から2004年7月

<調査方法> 調査対象の幼児の保護者及び幼稚園教諭・保育士（以下保育者）に幼児用思いやり行動尺度（無記名）に対する回答を依頼した。保育者へは幼児用IWM尺度に対する回答を依頼した。

<使用した尺度> 岩手大学教育学部心理学研究室が作成した幼児用向社会的行動尺度（12項目）と幼児用IWM尺度（18項目）を用い、5件法で幼児の保護者と保育者が行動評定を行った。

3. 結果及び考察

調査の有効回答数は532名、有効回答率は89.4%であった。幼児用IWM尺度は、I-T相関係数を求めた後、因子分析を行なったところ、成人用IWMとは異なる因子構造が求められた。第1因子を「安定型」、第2因子を「アンビバレント型」、第3因子を「愛情希求型」と名づけた。Cronbachの α 係数を求めたところ、第1因子が0.88、第2因子が0.87、第3因子が0.78であり、幼児

用 IWM 尺度は信頼性が高いと考えてよい（表 1）。幼児用向社会的行動尺度についても同様に分析し、単一因子構造であることが明らかとなった（表 2）。本研究では、幼児の向社会的行動について多角的に考察するため、思いやり行動と内的ワーキングモデル（IWM）タイプ、加齢、保育施設種との関連性、保育者・保護者双方の認知差について分散分析を行い検討した。

表 1 幼児用内的ワーキングモデル尺度の因子分析結果

項 目	因子 1	因子 2	因子 3	
・必要に応じて保育者を頼りにしながら安定して自分の活動を展開する。	0.866	-0.01	-0.03	
・自分が必要なときには保育者に対してためらいなく率直に援助を求める。	0.809	-0.06	0.167	
・ちょっとした保育者との関わりに安心感を得て、また遊びに戻る。	0.797	-0.03	0.027	
・保育者との親密な関係を持つが、友達との遊びや周りの探索をする活動が多い。	0.779	-0.16	0.097	
・遊びや活動の中で達成感や自信を持つ。	0.772	0.021	-0.1	
・家の人が迎えに来たときは、喜びを素直に表して甘える行動が見られる。	0.698	-0.32	0.071	
・しばしば保育者に対して、注意を引こうとしたり接触を求めたりする。	0.622	-0.2	0.32	
・自分の要求や意志を率直に保育者に伝える。	0.468	-0.04	0.362	
・突っついたり逃げたりするなど、直接ではないやり方で保育者との接触を求める。	-0.06	0.841	-0.05	
・保育者の助けが必要なときも、屈折した形で助けを求めることがある。	-0.16	0.778	0.238	
・保育者との接触を求めるが、ひとたび保育者が接近すると逆に拒否的な態度を示したりする。	-0.06	0.768	-0.32	
・情緒的に傷つきやすく、感情が高まると部屋の隅などに行って人との接触を拒絶したりする。	-0.06	0.762	-0.02	
・友達との関わりを持ちつつ一緒に遊ぶことが苦手である。	-0.22	0.761	0.249	
・不適切な方法で過度に友達の注意を引こうとする。	-0.02	0.744	-0.28	
・わざと困らせるなど、あまり効果的でないやり方で保育者の注意を引こうとする。	-0.06	-0.04	0.886	
・友達と関わることより、保育者の周りにいることを好む。	0.085	-0.04	0.81	
・してほしいことを言うより、保育者の近くで助けてくれることを待っていることが多い。	0.072	-0.11	0.743	
・迎えに来た母（父）親に接触を求めに行くが、叩いたり、キックしたりすることがある。	0.201	0.095	0.57	
	固有値	5.417	3.124	2.652
	寄与率 (%)	30.1	17.4	14.7

因子 1：安定型因子

因子 2：アンビバレント型因子

因子 3：愛情希求型因子

表2 幼児用向社会的行動尺度の因子分析結果

項 目	因子1
・泣いている子をなぐさめる。	0.852
・わからなくて困っている子がいたら教えてあげる。	0.849
・仲間に入れない子がいたら誘ってあげる。	0.822
・物をなくして困っている子がいたら一緒に捜す。	0.794
・友達に親切で優しい。	0.835
・喧嘩をしている仲間を見たら止めさせようとする。	0.791
・順番を自分から譲ってあげる。	0.445
・絵本やテレビを見ていてかわいそうになりもらい泣きする。	0.518
・友達のために先生に援助を求める。	0.764
・助け合ったり協力し合うことができる。	0.587
・弱い子や小さい子のお世話をする。	0.822
・友達のために心配してあげる。	0.822
	固有値 6.819
	寄与率 (%) 56.8

(1) 内的ワーキングモデルと向社会的行動との関係

幼児用 IWM 尺度により、安定型、愛情希求型、アンビバレント型の 3 タイプに分類した (図 1, 表 3)。これらは分析結果を説明する上での便宜上の命名である。さらに、各得点の平均値

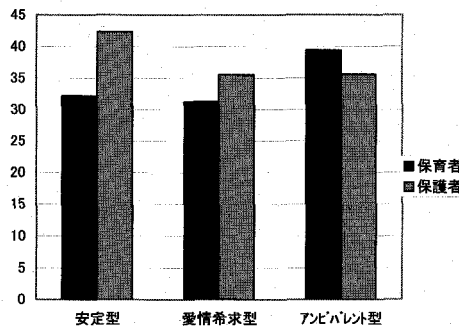


図1 IWMの型と向社会的行動

表3 IWM と向社会的行動 保育者・保護者の認知差

	保育者	保護者	t 値	F 値	多重比較 (5%水準)
安定型	32.17 (9.31)	42.32 (6.57)	-20.8****	保護者	アンビバレント>安定型
愛情希求	31.25(10.47)	35.50(10.72)	-1.00n. s.	保育安定型>愛情希求型	
アンビバレント型	39.41(8.15)	35.56(7.96)	1.73n. s.		アンビバレント型

()は標準偏差 ****: P<.0001 ***: p<.001 **: p<.01 *: p<.05

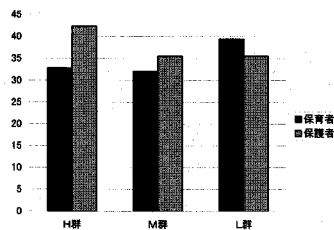


図2 安定得点と向社会的行動

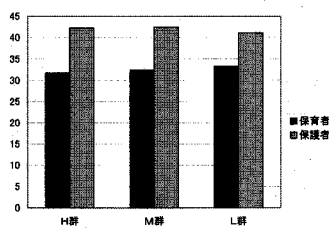


図3 愛情希求得点と向社会的行動

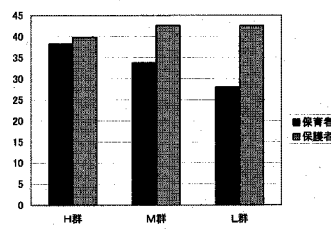


図4 アンビバレント得点と向社会的行動

表4 各得点群別向社会的行動 保育者・保護者の認知差

	保育者	保護者	t 値	F 値
安定得点H群	32.82(9.67)	41.73(7.71)	-10.26****	保育者0.49n. s.
安定得点M群	32.06(9.65)	42.17(6.30)	-13.32****	保護者0.23n. s.
安定得点L群	32.93(8.54)	41.80(6.51)	-9.16****	
希求得点H群	31.75(8.71)	21.24(5.83)	-12.37****	保育者1.17n. s.
希求得点M群	32.45(9.34)	42.50(6.61)	-12.48****	保護者2.23n. s.
希求得点L群	33.29(9.94)	41.09(7.79)	-8.79****	
アンビバレンド得点H群	32.24(6.46)	39.80(6.67)	-1.86n. s.	保育者59.32****
アンビバレンド得点M群	33.80(7.89)	42.60(6.41)	-12.63****	保護者 7.87**
アンビバレンド得点L群	28.04(9.95)	42.52(7.14)	-18.91****	

() は標準偏差

**** : P < .0001 *** : p < .001 ** : p < .01 * : p < .05

と標準偏差値により、高得点を示すH群、低得点を示すL群、その中間にあるM群に分け、向社会的行動との関係と保育者、保護者の認知差について考察した(図2, 3, 4, 表4)。保護者は、他の2型幼児に比べ安定型幼児の向社会的行動をより多く認知している(図1, 2)。これに対し保育者は、安定型幼児に比べアンビバレント型幼児の向社会的行動をより多く認知し、かつアンビバレント得点の高い幼児ほど向社会的行動が多いと認知している(図4)。この両者の差は、集団の中で多くの子ども達を比較し、相対的に認知することが可能な保育者と、家庭内で自分の子どもを認知する保護者との違いと考えられる。つまり、専門職の保育者は日常的保育現場において、大勢の子ども集団の対人関係の中で子ども一人一人を相対的に認知する。一方保護者は、自分の子どもを認知する場合、比較する対象が兄弟姉妹や近所の子ども達などの狭い範囲に限られ、また集団の中にいる自分の子どもの行動を見る機会が乏しいため相対的認知が困難になる可能性がある。

それでは、なぜ相対的認知者と推測される保育者に、アンビバレント型幼児、高アンビバレント得点幼児の向社会的行動が多いと認知されたのだろうか。先行研究の中で、自己主張性が比較的水準の高い向社会的行動と関係しているという研究報告⁸⁾がある。ある程度の支配性と主張性は、多くの子ども達にとって、自発的に他の人に近づいたり援助を申し出たりするのに必要なものであるという。アンビバレント型幼児、高アンビバレント得点幼児における自己主張性は、ここでいう支配性、主張性の現われなのかもしれない。そしてその自己主張性を表面化させる子どもの行動は、子ども達を集団保育する保育者にとって特に目に付き易く、子どもととの向社会的行動は目立つため、自然に認知され易くなるのであろう。

「安定した愛着を形成している子どもほど向社会的行動が多い」という仮説①は保護者の評定では支持されたが、保育者の評定では異なる結果が得られた。安定得点と向社会的行動の関連性が認められなかった背景には、尺度の性質が関係している可能性もある。本研究で用いた尺度は思いやり「行動」を得点化する目的で作成された尺度であり、飽くまでも「行動」として表出され、認知される「行動」を捉えるものである。安定型幼児、高安定得点幼児の思いやりや向社会性が決して低いのではなく、単に「行動」として表出されなかったのかもしれない。本尺度では測れなかった「共感性」を考慮して推測すれば、意識面においては、高安定得点の幼児の方が思いやりは多くもっている可能性も否定できない。

(2) 保育施設別の比較 (図5, 6, 表5)

保育者の認知において、全体、性別、年齢別のすべてにおいてF幼稚園の向社会的行動が有

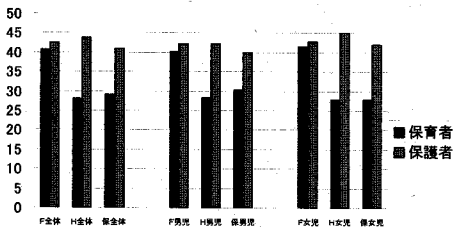


図5 保育施設別 認知差(性別)

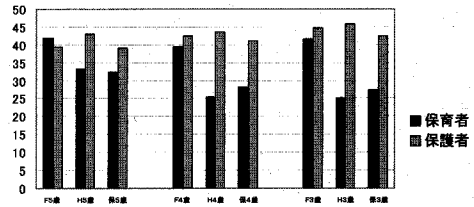


図6 保育施設別 認知差(加齢)

表5 保育施設別比較 保育者・保護者の認知差

	保育者	保護者	t 値	F 値
F 幼稚園児 (全体)	40.83(6.82)	42.60(6.50)	-2.79**	保育者139.11****
H 幼稚園児 (全体)	28.05(8.28)	43.94(5.93)	-14.89****	保護者 7.16****
保育所児 (全体)	29.14(7.82)	40.99(7.13)	-18.00****	
F 幼稚園男児	40.22(7.07)	42.39(6.40)	-2.24*	保育者47.1****
H 幼稚園男児	28.24(8.21)	42.33(6.07)	8.43****	保護者 4.46*
保育所男児	30.50(8.48)	39.90(6.97)	-8.87****	
F 幼稚園女児	41.49(6.51)	42.83(6.64)	-1.66n. s.	保育者102.98****
H 幼稚園女児	27.92(8.42)	45.04(5.63)	-12.48****	保護者 3.45*
保育所女児	27.77(6.87)	42.08(7.15)	-17.65****	
F 幼稚園 3 歳児	42.00(1.27)	39.39(6.66)	2.40*	保育者24.21****
H 幼稚園 3 歳児	33.36(8.26)	43.00(6.31)	-5.26****	保護者 3.43*
保育所 3 歳児	32.43(7.98)	39.00(7.53)	-5.15****	
F 幼稚園 4 歳児	39.43(8.08)	42.46(4.63)	-2.94**	保育者61.23****
H 幼稚園 4 歳児	25.29(6.25)	43.55(5.63)	-13.33****	保護者 1.97
保育所 4 歳児	28.11(7.05)	41.16(7.42)	-12.32****	
F 幼稚園 5 歳児	41.70(7.07)	44.71(7.42)	-3.02**	保育者 79.5****
H 幼稚園 5 歳児	25.18(7.79)	45.68(5.64)	-11.95****	保護者 3.43*
保育所 5 歳児	27.31(7.58)	42.52(6.09)	-16.29****	

() は標準偏差

**** : P < .0001 *** : p < .001 ** : p < .01 * : p < .05

意に高かった。この結果は、家庭的な日常養育の補完要素の強い保育所より、教育的保育を行う幼稚園の方が幼児の向社会性は促進されるかもしれないという仮説（仮説②）を部分的に立証する結果である。F幼稚園もしくはF幼稚園児の各家庭では向社会性を促進する教育環境がH幼稚園（延長保育あり）・保育所に比べ整っていると考えられる。

保護者の認知については、幼稚園児の向社会的行動が保育所児に比べ有意に高かった（図5）。先述したように幼稚園児の各家庭における向社会性の教育環境が、保育所児のそれに比べ整っている可能性がある。さらに保護者の認知については、幼児と保護者のコミュニケーション状態が関与している。保育時間4時間のF幼稚園児と、8時間保育（場合によっては延長保育なども行われる）の保育所児とでは保護者とともに過ごす時間に必然的な差をもたらし、この差が親子のコミュニケーションの質に影響を及ぼしていると考えられる。保護者と長時間離れている保育所児は、保護者とのコミュニケーションが希薄になる傾向があるがゆえに、幼児の示す向社会的行動を保護者が認知する機会を少なくしているのかもしれない。時間的な短さを補うために保育所児の保護者に対しては、「子どものことを多角的に良く知るような意識」を高める働きかけが必要である。

（3） 向社会的行動の加齢による変化（図7、表6）

「向社会的行動は、子どもの認知発達や教育によって促進されていく」とする先行研究から、「加齢に伴い、向社会的行動は増加する（仮説③）」と予測した。保護者の行動評定では、この仮説は支持された（図7）が、保育者の行動評定では加齢による増加が見られないばかりでなく4、5歳児の向社会的行動は、3歳児よりも少なく認知されている。この対照的な認知の差

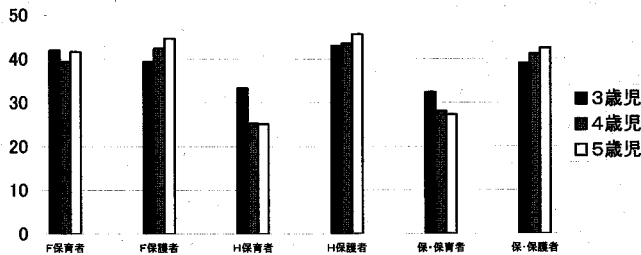


図7 加齢と向社会行動

表6 加齢と向社会的行動 保育施設別 平均と標準偏差

	3歳児	4歳児	5歳児	F値	多重比較(5%水準)
F保育者	42.00(1.27)	39.43(8.08)	41.70(7.07)	2.46n. s.	—
F保護者	39.39(6.66)	42.46(4.63)	44.71(7.42)	8.20***	5>4>3歳児
H保育者	33.36(8.26)	25.29(6.25)	25.18(7.79)	10.98****	3>4、5歳児
H保護者	43.00(6.37)	43.55(5.63)	45.68(5.64)	1.38n. s.	—
保育所保育者	32.43(7.98)	28.11(7.05)	27.31(7.58)	12.35****	3>4、5歳児
保育所保護者	39.00(7.53)	41.16(7.42)	42.52(6.01)	6.01**	4、5>3歳児

()は標準偏差 ****: P < .0001 ***: p < .001 **: p < .01 *: p < .05

は、保育者と保護者の発達評価基準の違いに起因しているかもしれない。保育者は、専門知識を基に子どもの発達を「この年齢ではこのくらい」という基準でとらえているためと考えられる。その基準は、保育者より保護者の発達基準が低くなる傾向があり、向社会的行動の認知に影響を及ぼしている可能性がある。今日の少子化社会における保護者が認知する向社会的行動は、わが子の成長を細かく見ることが可能になると同時に、その子に対する固有の基準を作り出し、無意識にひいきめな認知が加わることが推測できる。そして保育者・保護者間の認知的齟齬を生み出し易くしていると思われる。

本研究は年齢ごとの横断研究である。長期的な縦断研究を行えば統計上には見られない加齢に伴う向社会的行動の増加が認められるかもしれない。発達における個人差を考慮して本研究に縦断研究を加え子ども一人一人を丁寧に見ていく必要がある。

(4) 幼児における保育者・保護者双方の向社会的行動に対する認知の比較

保育者と比較して保護者は、子どもの向社会的行動を多く認知する理由として、保護者の子どもに対する発達評価の基準が保育者と比べ緩やかなことと、今日の核家族化・少子化に伴ない相対的認知が困難になっていることを挙げた。保育者は集団の中で一人一人の子どもを見る機会が多いが、保護者は集団の中で自分の子どもを見る時間は限られている。保護者は必然的に主観的認知になることに加え、我が子ゆえにひいき目に見てしまうことは前述のとおりである。

しかし、ここで注目したいのは、F幼稚園の保護者の認知である。F幼稚園の保護者と保育者の認知的齟齬は、他の保育施設の保育者・保護者間と比較して少ない(図5, 6)。F幼稚園は大学附属幼稚園であることが齟齬の少なさに関連しているのではないかと考えられる。学部との研究協力など日常的に保育に対する保護者の関心が高く、保護者と保育者の情報交換が密に行われている。また、保護者が幼稚園で我が子以外の園児達とともに活動する機会、たとえば、園行事の充実・保育参観及び保育参加(保護者が得意な分野で、クラスを超えて保育の援助をする)が多い。これらのことが保育者・保護者間の認知的齟齬を少なくしているのかもしれない。もし、これらの推測が妥当なものであるならば、他の保育施設においても情報交換、保護者の園行事への積極的参加を図ることによって、子どもに対するより客観的な認知が可能なものになるだろう。

4. 今後の課題

本研究は、行動面から捉えられる幼児の向社会的行動を、保育者・保護者の双方から評価することにより多角的に分析した。向社会的行動を形成していくための更なる内的側面(向社会的判断、役割取得、共感性)についての分析とその縦断的研究^{9,10)}は、今後の課題である。また幼児のIWMのタイプについて、早期の親子関係の質は、その後の親しい他者との関係を予測し仲間や教師との関係においても支持されるとするAinsworthやBowlbyの理論に基づいている。しかし、近年のアタッチメントパターンの研究は2因子構造¹¹⁾が増加しており、親と保育者とのアタッチメントパターンは関連性が薄いという見解もあるので、日本においても横断的な研究のみならず、保護者との連携を密にした保育施設での縦断的研究の蓄積が必要である。

引用文献

- 1) Underwood, B. and Moore, B. S. Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, 91, 143-173, 1982.
- 2) Eisenberg, N., Lennon, R. and Roth, K. Prosocial development: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, 19, 846-855, 1983.
- 3) 宗方比佐子・二宮克美「プロソーシャルな道徳的判断の発達」(『教育心理学研究』 33, 157-164. 1985)
- 4) Peterson, L. Influence of age, task competence, and responsibility focus on children's altruism. *Developmental Psychology*, 19, 141-148, 1983.
- 5) Bowlby, J. *Attachment and loss: Vol. 2. Separation*. New York, Basic Books, 1973.
- 6) Bowlby, J. *Attachment and loss: Vol. 3. Loss*. New York, Basic Books, 1980.
- 7) Ainsworth, M. D. S., Bleher, M. C., Waters, E. and Wall, S. *Patterns of Attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 1978.
- 8) Yarrow, M. R., Waxler, C. Z., Barrett, D., Darby, J., King, R., Pickett, M. and Smith, J. Dimensions and correlates of prosocial behavior in young children. *Child Development*, 47, 118-125, 1976.
- 9) Braungart-Rieker, J. M., Garwood, M. M., Powers, B. P. and Wang, X. Parental sensitivity, infant affect, and affect regulation: Predictors of later attachment. *Child Development*, 72, 252-270, 2001.
- 10) Kochanska, G. Emotional development in children with different attachment histories: The first three years. *Child Development*, 72, 474-490, 2001.